6. 学習のふり返り・評価のポイント

福祉教育におけるふり返り・評価のポイント

福祉教育において大切なことは、一方的な知識定着や対象理解、技術習得をすることではなく、子どもたちが福祉を他人ごとではなく自分ごととして捉え、福祉課題や地域課題に対してどのように向き合ったか、そこで何を思い、何を考えたのかを丁寧にふり返り、評価することが大切です。

● 福祉を他人ごとではなく、自分ごととして捉えているか

子どもたちに対して、いきなり高齢者や障害者の方について調べたり、考えたりするような働きかけをしても、子どもたちにとっては「自分とは関係のない他人ごと」となってしまいがちです。

まずは、子どもたちが自分自身の「しあわせ」について考え、そこから「高齢者の方にとってのしあわせは？」「障害者の方にとってのしあわせとは？」･･･というように繋がりを意識したプログラムを展開することで、他人ごとではなく自分ごととして捉えやすくなります。

● 学習の過程を通して福祉課題や地域課題にどのように向き合ったか

学習の過程において、子どもたちが福祉課題や地域課題に対してどのように向き合ったか、そこで何を思い、何を考えたのかに注目することが大切です。そのためには、全体の学習の終わりにまとめとして感想文を書くだけではなく、その学習ごとに子どもたちに感想を聞き、話し合うことで、次の学習への橋渡しとなったり、子どもたちの内面や意識の変化を確認することができます。

● 子どもたちの小さな変化を捉える

車いす体験やブラインドウォーク体験等を通して、普段通っている通学路の傾きや段差、点字ブロックの上にある放置自転車などの障害物等に気づくようになる子どもがいます。また、新聞やテレビのニュースで福祉に関係する内容に興味・関心を持つ子どももいます。これらは、体験学習が子どもたちにもたらした変化であり、このような子どもたちの小さな変化を捉えることも大切です。

● 即時的・表面的な変化ばかりではない

子どもたちにとって学習した内容が意味のあるものになったかどうかは、体験の直後の場合もありますし、ある程度時間が経ったあと、何年も経過した後に見出される場合など個人差があります。

● お互いの「気づき」を確認・共有する場を設ける

学び手である子ども自身がひとりで学習をふり返るだけでは、体験による学びは深まりません。一緒に学習した他の子どもたちと相互に、またはグループでふり返り、お互いの気づきを確認しあうことも大切です。また協力していただいた地域の方々と共に体験の内容をふり返ることも、協力者にとっての新しい気づきに繋がり、体験学習の質を高めることに繋がります。